

ベルタ、それともエマ？
——初期シュトルムの詩について——

加 藤 丈 雄

| | |
|---|-----|
| (序) | 63 |
| 第1章 研究史概観 | 65 |
| 第2章 出会いの夜そして翌朝 ——「愛の痛み」(バルタそれとも…) …… | 70 |
| 第3章 「愛の痛み」(…それともエマ?!) …… | 79 |
| 第4章 「エマの記念帖に」その他 …… | 84 |
| 第5章 「カモメと心」(バルタそれともエマ?) …… | 94 |
| 第6章 エマ、その面影 …… | 103 |
| まとめ、そしてしめくくり …… | 107 |

1836年のクリスマス・イブはシュトルムにとって忘れがたいものとなった。前年の10月に、大学進学のための準備のため、ふるさとを離れてもう2回目のイブである。フーズムのラテン語学校から、このハンザの女王と誉れ高い都市リュューベックの名門ギュムナジウムに転校してきたのは彼ひとりではなかった。しかし、そうとはいえまだ10代の若者である。望郷の念に駆られるのは1度や2度ではなかっただろう。カタリーネウム校での優れた教育者との出会いや、何より文学の才能あふれる同世代の友人レーゼやガイベルとの交遊を通じ、それまで知らなかったロマン派の詩人たちやハイネの作品に触れることで文学の目をひらかれた彼は、そういった郷愁の情を詩に表わしてもいる。まだまだ借り物めいた常套句や、お定まりの感情がうたわれている習作が多い中で、そういったふるさとの詩は、やはり切実な思いが表現されているためか、他と比べて質の高いものになっている。のちに実感を何よりも重視した体験詩人の本領がすでにここに見て取れるようである。内面から抑えがたく湧き起こってくる感情、詩という形式に表現せずにはいられない感情——しかし、それは郷愁だけではなかった。

2度目のイブをシュトルムはふるさとではなく、母方の親戚があるハンブルクで過ごすことにした¹⁾。もちろんリュューベックからの交通の便がフーズムより遙かに良かったこともある。しかし、年が明ければ4月からは彼も大学生である。異郷の暮らしにも多少慣れたのであろう。立派に独り立ちした若者として母の従妹フリーデリーケ・シェルフの家庭を訪問したに違いない²⁾。

フリーデリーケの夫ヨナスはハンブルクで商売を営んでいた。そのためであろうか、本来は家族のお祭りであるクリスマス・イブに、遠縁の若者だけではなく、親しい知人たちもまた招いていた。その中にテレーゼ・ローヴ

オールと彼女の養女ベルタ・フォン・ブーハンもいた。³⁾

当時まだ10歳で、青い瞳と茶色い巻き毛のこの少女にシュトルムは強い印象を受けた。それから6年後の1842年秋、正式に婚約を申し込み、拒絶されるまで（そしてそれからあとも）シュトルムの感情生活の大きな部分を占めることになるこの少女との^{いきまっ}経緯をトーマス・マンは「決して正しいとは言えない」たぐいの「エロスのなエピソード」と呼んでいる。⁴⁾マンに言わせれば、無邪気な少女に対しシュトルムは「長年にわたって文学的偶像崇拜（poetischen Kultus）を献身的に行なった」ということになるのだが、また、昨年、最新のシュトルム伝を執筆したミスフェルトによると、この間の出来事は次のように紹介されている。

シュトルムという人物および文学に関して言うと、ハンザ都市リューベックで彼は知恵の木の実を食べてしまった。エルベ河畔のアルトナ〔ハンブルクの地名〕で「知恵」は彼を虜にした。それは無垢な子供の姿をして彼の前に現われた。この1836年のクリスマス・プレゼントを手にしてシュトルムは、おのれの詩人としての自我を照らし出し、よりいっそう認識を深めたのだ。ひとりの子供にことよせて、情熱的な愛の歌が、そして官能的な歌声が奏でられるのを私たちは耳にすることとなる。⁵⁾

彼一流の比喩的表現ではあるが、この出来事を取り扱った章のタイトル名「プロジェクト・ベルタ」からも明らかなように、ミスフェルトもまたマンと同じく、ベルタとの恋愛関係を実体としては見ていない。長年にわたる「文学的偶像崇拜」同様、若き詩人シュトルムの思いが一方的に作り上げた^{プロジェクト}一大計画 だったと捉えているわけである。

第1章 研究史概観

ここで、私たちはベルタ・フォン・ブーハンについて、そして彼女とシュトルムとの〈恋愛関係〉について、簡単に研究史を振り返っておくことにしよう。

先に紹介したマンの「シュトルム・エッセイ」は、本来1930年に出版されたシュトルム全集の解説用に書かれたものであった。⁶⁾ 当時、どのような経路で、どの程度までベルタのことをマンが知っていたのか、定かではないが、「文学的偶像崇拜」を見て取ったのは、やはり慧眼と言えるのかもしれない。というのも、ベルタに関する資料の全容が明らかになるのは第2次大戦後のことだったからである。⁷⁾ もちろん、1912年に上梓されたゲルトルート・シュトルムの伝記にはベルタに関する記述がある。⁸⁾ しかしながら引用される書簡類は恣意的とまでは行かずとも断片的であり不正確なものであった。さらにまたベルタの遺品（彼女は生涯独身を貫き、ハンブルクの養老院で1903年、77歳の生涯を閉じた）の中に発見されたシュトルムの詩や彼の初めての童話『熊の子ハンス』、あるいは書簡の一部が、マンの文章と同じ1930年には出版されてもいる。⁹⁾ しかし、それも残念ながら限定125部の私家版であり、容易に手に入るものではなかった。

ベルタ本人の他に、養母ローヴォールあるいはフリーデリーケ・シェルフとシュトルムとのやりとりの全てが公表されたのは、1953年のシュトルム協会論文集によってであり、¹⁰⁾ ようやくベルタ関連の一切を我々も知るができるようになった。その後、それを批判的に増補改訂し、さらにはベルタとの関連がはっきりしている（あるいはそう考えられる）詩や散文作品をエーヴァスベルクがまとめた書物が1995年に公刊されるにいたり、ベルタ関連の

研究は大いに進展することとなった。¹¹⁾

「その目はブルー、夜のように深い褐色の巻き毛」（「幼い恋」126）と、シュトルムにうたわれたベルタ・フォン・ブーハンは、ボヘミア地方のルムブルクに1826年2月1日に生まれた。母とは生後すぐに死別。父エドゥアルト・フォン・ブーハンは教養ある裕福な貴族で、イタリアやフランスに旅したほか、事業のため長年メキシコや南アメリカにも暮らしたことがある人物であった。生後まもないベルタを残され、しばらくは妻の係累に子育てを任せていたが、おそらくそのカトリック的教育が気に入らず、1830年にはハンブルクのテレゼ・ローヴォールのもとに預けることにしたらしい。

テレゼ・ローヴォールは1782年生まれ、顧問官の馬丁をしていた父親が¹²⁾残してくれた小さな家に妹イエツテと慎ましく暮らす「聡明で上品な女性」¹³⁾であった。当初、ベルタを預かるに際しては、やはり見返りに支払われる給金が物を言ったようではあるが、やがてはそのような損得勘定を越え、彼女を我が子のように愛したらしい。というのも、ベルタの父がメキシコの事業を任せていた男のせいで財産の多くを失い、十分な給金が支払われなくなってからも彼女をそれまで通り手元におき養育し続けたからである。敬虔なプロテスタントであるテレゼの宗教心はベルタにも着実に伝わった。養母同様に生涯独身を貫いたのも（シュトルム以外にも後にある医者から結婚を申し込まれたが、やはり拒んでいる¹⁴⁾）、またその感化のせいかもしれない。後年、コンスタンツェと結婚してのちにシュトルムはシェルフ家で34歳のベルタと再会している。そのときの模様を妻に知らせる手紙には次のような感想が記されている。

金曜日はフリーデリーケ [シェルフ] の誕生日だった。そのお祝いにベルタもテレゼもやってきた。かつて僕の心を燃え立たせた人は今も本

当に素敵で興味を惹かれる。その外見だけではなく、僕に対しても親切で愛すべき性格の持ち主だった。ただ、それにもかかわらず、僕の中には彼女にある種の独善的オールドミス臭さを感じ取る何かがあった。天よ、あんな人が僕の妻だったらどうなっていたら¹⁵⁾！

過去の全てを承知しているとはいえ妻宛の手紙である。多少割り引いて読む必要があるかもしれないが、やはり何といてもテレゼ同様ベルタにも信仰に凝り固まる頑なさがあったのは事実だろう。逆に言うと、そういった面に敏感に反応するシュトルムの反キリスト教的メンタリティを彼女たちもまた鋭敏に感じ取っていたに違いない。少なくとも付き合いの初期、それはテレゼにとって快いものではなかつただろう。彼を養女の結婚相手として認められない最大の理由もおそらくそれだつたのではないか。ベルタもテレゼも断りの手紙の中で様に年齢のことを理由として挙げている。しかし、堅信礼もすませた16歳という年齢は当時、結婚してもそうおかしくない、ましてや婚約となれば決して早すぎる年齢ではなかつたはずである。ベルタに正式な結婚・婚約を申し込んだシュトルムは、文学かぶれして多少心もとならない点はあるにせよ、あと数ヶ月もすれば大学を卒業し弁護士になる人物である。当面の経済的自立はまだ望めないにしても、そう遠くない将来には安定した家庭を築けるはずであつた。それにもかかわらず、申し出をすげなく拒んだのは、やはり何といても信仰心の問題があつたからだろう（コンスタンツェとの結婚式をシュトルムは教会で行なっていない。彼にすると、そのような儀式は、それ自体で神聖な愛に対する冒瀆だから、であつた¹⁶⁾）。そういった養母の判断は、また娘の判断ともなつただろう。少なくともシュトルムにはそのような養母の〈感化〉があつたと思へたに相違ない。『みずうみ』の中で描かれるエリーザベトと母の間にも、そんな母娘関係の反映を私たち

は見取ることができる。

それはともかくとして、出会いのとき、10歳の少女にはまだそのような宗教的不寛容など微塵も感じられなかった。たとえ、その萌芽があったとしても、幼い無邪気さの中にあっては、かえって魅力に感じられたかもしれない。そのあたりのことを、シュトゥカートは次のように述べている。

ベルタ6歳の肖像画を見てみると、繊細でとても印象深い表情をしている。しかし成長するに従い、——おそらくある部分では、非常に敬虔な育ての母の影響のために——過剰な信仰心が生まれてきたし、また早熟で聡明な特徴も発揮されてきた。それはその子本来の気質とは著しい対照をなすものであった。シュトルムが出会った頃は、しかし彼女はありえないくらい自由奔放で明るい性格の化身だった。このまだ自己の中だけで完結した幼い無垢と完全性の魅力が、若い高等学校最上級生の心を虜にした。とはいえ、クリスマスの朝、この出会いの強い印象のもとで書かれた最初の詩は、不器用で、体験の深さを感じさせるようなものはまだほとんど見当たらない¹⁷⁾。

このようなベルタ像や作品評価は、シュトゥカートひとりに留まらず、これ以降長年にわたって踏襲されてゆく。いわば規範と言っても差し支えないものである。もちろん、ベルタとの7年近くにわたるやり取りの中からはシュトルム独自の詩とってよいものも生み出されては来るのだが、やはり質から言ってコンスタンツェやドロテア関連の詩に及ばぬものが多いことも事実である。したがって詩人シュトルムの生涯を跡づけると、ベルタとの出会いも伝記的事実としては興味深い¹⁸⁾が、文学研究的には二次的な位置づけをされることが多かった（そこには研究者の側に「小児性愛」^{ベドフィリー}的なものを忌避

する心理があったという多少うがった指摘もあるが、はたしてどうだろうか）。

80年代以降になると、そういった位置づけに新たな光が当てられるようになった。それはレープリングによるシュトルムの深層心理に着目する研究によって端緒を開かれた。¹⁸⁾ 彼女は初期散文作品に頻出する形象を究明するにあたり、詩人の実人生に注目し、シスターコンプレックスを見て取ったのである。つまり、愛情表現に乏しい母に対し〈分離不安〉を抱いた長男テオドールが妹に〈代償〉を求め、しかもその幼い妹と死別することで彼の心の中に解きがたい〈固着〉が生じてしまったのだとレープリングは捉えている。このような知見は、その後ファーズルトに引き継がれ、精神病理的側面に留まらず、ヨーロッパ全体の文化史的側面へと拡張されることで研究の広がりを与えられた。¹⁹⁾ こういった視点から作品（とくにそこに描かれた少女たち）を捉え直すことで説得力ある解釈が提示されるようになり、今日に至っている。²⁰⁾

なかでもデテリングは2011年に上梓した書物の中でベルタとの関係を研究の中心に据え、論を展開している。

子供時代・少年時代がもはや取り戻せない過去のものとなったとき、ひとりの子供に対する愛情は、文学的な^{オブセッション}強迫観念となる。今や成人した若者にとって、ひとりの子供が、失われた幼年時代の代用をつとめてくれる。その子供がベルタ・フォン・ブーハンであった。若き作家が彼女に注いだ愛は、高等学校時代の^{エビゴナリテート}模倣主義から脱却し文学的自立へと突破をはかるように促したし、またそれが叶えられたことを明確に表わすものでもあった。当初、彼女とごく近しい個人的な関係を結ぶためだけに行なわれていた物語や詩の試みは、徐々に（ときおりは微妙な自己検閲の

予防措置を講じ）公表されるようになり、彼の抒情詩の基盤を形成することになる。その基盤の中に彼自身は、人生の最後に到るまでのあいだ自らの作品の最も重要な、そして最も永続する部分を、そう、彼の短編小説の秘密の中核さえも見出したのだ²¹⁾。

以前はコンスタンツェやドロテーアの陰に隠れがちであったベルタ体験は、ここではシュトルム文学の決定的な分岐点と見なされている。デテリングによると、ノヴァーリスやグリムたちによって見出された、幼年時代という〈黄金郷〉の再獲得をシュトルムもめざし、真剣に格闘し、やがて力尽き挫折することで、彼はロマン主義を越え、リアリズムの道を歩むようになる²²⁾。このことであるが、その一大契機となったのが、ベルタ体験なのであ²²⁾。

第2章 出合いの夜そして翌朝

——「愛の痛み」（ベルタそれとも…）

ここまでベルタに関して基本的な情報や研究の動向を概観してきた。デテリングを初めとして、最近とみに重要視されるようになってきたのがベルタ体験であった。そこで私たちも、これから再び1836年のクリスマス・イブ、ハンブルクのシェルフ家の客間に戻ることしよう。

この時の出合いについて、のちにシュトルムは次のように書いている。

あなたもご存じでしょうが、ベルタが子供のときから僕はずっと何くれとなくかまってやっていました。——あのクリスマス・イブの夜、まだあなたの素晴らしいお母さまがご存命で、僕もご一緒できたあの夜に、あの子と出合って以来、僕の中にある考えがはぐくまれてきたのです。

つまり、この子の心を僕の虜にしたいと思ったのです。いま僕が口にしなければならないことは、ひょっとするとあなたには色々わかりにくいことかもしれません。でも、そうなのです。僕は当時、あの子をもう愛していたのです。こう言ったからといって、あれこれ考えを巡らさないでください。親愛なるフリーデ [=フリーデリーケ]、僕の言葉を丸ごと信じてくれなくてははいけません！²³⁾

これは、1841年3月にフリーデリーケ・シュルフに宛てられたもの。つまり、ベルタと知り合ってから、はやすでに5年目に入ったころの手紙である。10歳の少女ももう15歳の娘となり、19歳の「高等学校最上級生」も、あいだに1年半のベルリン大学在学をはさみ、今やキール大学での学業もあと1年半を残すだけとなっている。

実は、この間にふたりはそれほど頻繁に会っているわけではなかった。当時の事情を考えればわかることだが、ハンブルクはキールからでも相当に、ベルリンからとなれば、とても遠い距離に隔てられている。残された書簡類から推測すると、この間に3回ほどシュトルムはハンブルクを訪問しているだけである。その滞在もそう長期にわたるものではない。いくら親しいとはいえシュルフ家とローヴォール家との間をそう頻繁に行き来したわけでもなかっただろう。フリーデおばさんがテーオドルの心の中に「はぐくまれてきた」「愛」に気づかなかったとしても、そう不思議はない。

しかし、感情というものは、障害に直面するといっそう強くあおり立てられることがある。距離の隔たりは、手紙により、そして何よりも、そこに添えるべき詩によって克服され、いっそう熱い思いへと駆り立てられたのであろう、少なくともシュトルム本人にとっては。

それゆえにこの1841年の告白の手紙は、多少割り引いて読まなければなら

ないのかもしれない。はたして、出会いのその夜に、本当に「あの子をもう愛していた」のかどうか、私たちはつい「あれこれ考えを巡ら」したくなってしまう。

シュトゥカートなども、当初の付き合いに関しては「まだ本当の恋愛と言うよりは、ロマンチックなお遊びにすぎないものであった」と述べている。彼の见解によれば「ベルリンから戻ってくる第2次キール滞在の時期 [当該の書簡もこの時期に当たる]、——その頃にはベルタも娘に成長してきて——ようやく初めて、シュトルムの感情は本物の情熱にまで高まるのである」、²⁴⁾ということになる。

たしかに、イブの夜、初対面の子供にいくら魅了されたとはいえ、シュトルムのしたことといえば、膝に乗せてやり、お話を聞かせるとか、一緒にクリスマスソングを歌うとか、そういったたぐいのたわいもないお遊びでしかなかっただろう。小母やその他の家族たちも、なんら気づくことのない、ごく普通のつきあいだった（だからこそ、今の手紙では「僕の言葉を丸ごと信じてくれなくてははいけません！」と念を押さなければならないのである）。

しかしながら、無垢で無邪気な子供の「完全性」に〈黄金郷〉を見出した者にとって、傍目にはたわいもないお遊びも、それはすでに愛の行為だったのかもしれない。信仰体験にも似たベルタ崇拜は、この時もうすでに開始されていたのかもしれない——少なくとも1841年、かつての出会いを回顧している大学生にとっては、そうだったのだろう。私たちも、彼の「言葉を丸ごと信じ」ることにしよう。

*

明けて25日、クリスマスの朝、シュトルムはひとつ詩を書いた。

愛の痛み

アルトナにて

1

嵐がとどろく、雲が流れてくる
遙か遠い北の方から
そして、僕のいとしい人からの
待ち遠しい知らせを届けてくれる

「ああ、教えておくれ、軽やかな我が友たちよ
僕のいとしい人を見かけたかい？
あの子は今でも誠実で愛らしく綺麗でいてくれるかい
僕のあの素晴らしくかわいい婚約者^{フィアンセ}は？」——

嵐はおそろしい速さで行き過ぎる
猛り狂う風の中、まぎれもなく
雲の涙があふれ出る、とどめようもなく——
それは何を物語る？ そんなこと知りたくなんかない (179)

彼に訪れた創作意欲は、これに留まらず、続いて2と3を生み出し、さらには年が明けて1月の2日には4をこの世に送り出した。

2

どんなに愛していることか、美しい太陽よ、君を！
明るい天上の光よ
君の真っ直ぐな光は、僕の心に命を吹き込んでくれる、
たとえ苦悩のあまり、胸が押しつぶされていようとも。

いとしい人も君とよく似ている
あの子も君のように美しい
でも、あの子の目に宿る天上の輝きは
決して僕に安らぎを与えてはくれない。

(179)

3

冬の霧そしてまた霧、その中を
僕の歌が悲しく響く
天上の神聖な青
それを隠す黒雲くろくもの羽根のざわめき。

ひとりぼっちで立ちつくし、涙にくれる——
遙か遠くに行ってしまった、僕のあの青い瞳は
もう二度と、あの星から
喜びも瑞々みずみずしい歌も汲み取ることはできない。

(180)

4

太陽が空を昇ってくる

僕のいとしい人は旅立ってしまった
ひどい天気だけが、あの子を
あの場所にとどめてくれたのだ。

君が夜を追い払うから
ああ、偉大にして高貴なる太陽よ
星々もまた同時に逃げ去ってしまうのだ——
もう二度と再び会えない、最愛のあの子に。 (180)

すでに見たように、シュトゥカートは「クリスマスの朝、この出会いの強い印象のもとで書かれた最初の詩は、不器用で、体験の深さを感じさせるようなものはまだほとんど見当たらない」と断じていた。また彼は他の箇所で、

たしかに1836年のクリスマスに起こったベルタ・フォン・ブーハンとの出会いは、すぐにいくつかの詩という形で結実をみた。それらは、「愛の痛み」というタイトルのもとにひとつにまとめられた。だがしかし、その詩群には、しっかりとした直接的な感情の息吹が感じられる言語形式は何ら見当たらない。イメージの選び方、脚韻や様式、それらどれをとってもフーズム時代の月並みな型どおりの駄作とまったく区別できない²⁵⁾。

と、いっそう詳しく、いっそう手厳しく否定的評価を下している。

このような厳しい評価は彼ひとりのものではなく、ほとんど全ての研究者に共通するところであったし、今でもそうであるだろう。私たちも、その点に対しては異を唱えるつもりはない。

だがしかし、はたして、その前提部分については、指摘どおりと考えてよいのだろうか？ つまり、「愛の痛み」は、はたしてベルタとの出会いが結実した作品と見なしてよいものだろうか？

もちろん、この点についても、現在までのところ全ての研究者の見解は一致している。シュトゥカート以降で言えば、ベルタ体験の資料を集めた例のエーヴァスベルクの著作にも作品の部の第1番目に「愛の痛み」が掲載されている。²⁶⁾そして、何より私たちが研究の拠り所としている LL 版全集のコメンタールにも「作品成立」として次のように記述されているのである。

シュトルムは1836年のクリスマス休暇をアルトナに住む商人ヨナス・ハイブリヒ・シュルフ（1798-1882）のもとで過ごした。彼の妻フリーデリーケ（1802-1876）はシュトルムの母の親戚であった。その家で彼はベルタ・フォン・ブーハン（1826-1903）と知り合うことになった。（LL1, 920）

「愛の痛み」はベルタ体験が生み出した第1作品と、いわば公式に見なされているわけである。²⁷⁾

しかし、はたしてそのとおりであろうか？

もう一度、「愛の痛み」そのものを読み直してほしい。作品の質や出来の善し悪しを評価するのではなく、書かれているところ、そのものを素直に読んでみよう。

嵐がとどろく、雲が流れてくる

遙か遠い北の方から

そして、僕のいとしい人からの

待ち遠しい知らせを届けてくれる

無邪気で無垢な子供に接し、彼女にどうしようもなく惹かれたとして、なぜ「遙か遠い北の方から」（上点、加藤。以下同様）などといきなり歌いだすのだろうか。「僕のいとしい人」は同じアルトナにいるのではないのか？ 昨夜楽しく過ごしたばかりなのに、なぜ「待ち遠しい知らせ」なのか。そして、それはなぜ、最後には涙につながる悲しい知らせなのだろう。「あの子は今でも誠実で愛らしく綺麗でいてくれるかい／僕のあの素晴らしくかわいい婚約者^{フィアンセ}は？」とは、いくら何でも昨夜出会ったばかりの少女には唐突すぎる表現ではないか。いちいち挙げれば切りがないほど不自然さが目立つ。第一、出会った翌朝にいきなり（「愛の予感」や「愛の喜び」ではなく）「愛の痛み」を詩に形象化するだろうか？ これはどう理解したらよいのだろうか。同じく出会いのあとにできた「子供のいのり」（181、「37年1月5日」成立）や「かわいい巻き毛の子」（182f.「37年1月6・7日」成立）などと比較すれば、その疑問はあっという間に強くなる。たとえば「子供のいのり」、

「ひゃー、寒い！ ござえて
お口もあかないわ
お祈りの文句もまだでてこないわ
ねえ、我らが天のお父さま！」

そして、ようやく暖まると
かわいいその子はもう眠り込んでしまってる
すやすや寝息をたてる少女のかわりに
静かに祈ってくれる天使たち

(181)

この四行二連詩に描かれている子供の姿こそ、イブの夜、ベルタとの出会いがもたらしたものであろう。そこに青年詩人は汚れない無邪気を見て取り、その気高さを言葉に定着せずにはおられなかったのである。

ひるがえって、出会いの翌朝に書かれた詩の中に、そういった子供の姿を見出すことは難しい。それは「イメージの選び方、脚韻や様式」などとは根本的に違った問題である。

無垢な子供の姿に触れ、本人の言うように、たとえその瞬間に愛し始めたとしても、まだ彼の内部には言語化するべき体験の蓄積はなかった。それは当然である。恋愛感情の発動に捉えられた若きシュトルムが、そのとき心の中に見たものは、豊富とは言えないにせよ、それまでに彼が味わってきた他の恋愛のつらく切ない思い出だったのではないか。きっかけはベルタとの出会いであったとしても、うたわれているのはベルタではなく別の人物、フーズム時代に遠くから思いを寄せたことのある「いとしい人」だったのではないだろうか（だからこそ、イメージも形式もフーズム時代と何ら変わるところがないのである。それもまたごく当然のことであった）。

シュトルムは、現実を頭で捉えるだけの大人に対し、子供たちは、世界を「彼らの想像力が産み出した、美しい魔法の鏡の中に映して見ている」と語っている。そして、それゆえにこそ子供たちを自分は愛するのだ、とも言うのである。²⁸⁾ デテリングの指摘どおり、ノヴァーリスやグリムばりの子供観に導かれ、この新たなロマン派詩人は自らもベルタという「美しい魔法の鏡」を手に入れようとしたのだろう。しかしながら、「鏡」は「鏡」を映さない。「鏡」に映るのは、それを覗き込むものの姿である。少なくとも出会った当初、その鏡面に彼が見たものは、自らの心の中に蓄積してきたこれまでの恋愛体験のよみがえりだったのであろう。

第3章 「愛の痛み」(…それともエマ?!)

1836年のクリスマスの朝、シュトルムの心によみがえってきた「いとしい人」、「遙か遠い北の方から」の雲が「待ち遠しい知らせを届けてくれる」人物とは、いったい誰だったのだろうか。誰のことをイメージして彼は、この詩を造形したのだろうか。

リューベック時代もそうだが、ことフーズム時代に関しては、我々が参照できる伝記資料はごく限られている。書簡文化の根づいていた19世紀教養市民層の子弟とはいえ、²⁹⁾親元に暮らす10代の若者が書いたであろう書簡類はほとんど残されていない。また、日記のたぐいも残念ながら残ってはいない。しかしながら幸いにも私たちが今、唯一抛り所とできるものが残されている（しかもそれは今の場合、最適のものと言えるかもしれない）。——「僕の詩集（Meine Gedichte）」、そう表書きされた1冊のノートである（略号MG）。

この「僕の詩集」の第1頁には、1833年7月17日、つまりまだ16歳にもならないシュトルムの詩が書き込まれている。

エマへ

僕を避けようとする君
冷たく別れようと
ならば、さらば！

ああ、おどけてみても
悲しみは和らがず

ああ、この胸の痛み！

でも、口に出すもんか

でも、嘆くもんか

自分のことなんか

他に薔薇がないわけじゃない

愛を捧げる花はいくらでも

君がいなくたって！

今日はミーネ

あす
明日はリーネ

ダンスの相手はいくらでも

移り気な美人草を
ひなげし

君みたいな人には捧げよう

はなわ
花冠にしたまえ

僕を避けようとする君

冷たく別れようと

ならば、さらば！

誰か、おどけて

悲しみを和らげてくれ

ああ、この胸の痛みを！

これは、15歳の少年の、まだ「巢立ちの練習」(LL4, 491)とも呼べない作品かもしれない。いかにもアナクレオン風に描かれる恋愛遊戯は、お定まりの文言に終始している。しかし、そのような作品の質はともかくとして、私たちの注意を惹かずにはおかない点がある。それは、この恋愛（遊戯）が喜びをもたらすのではなく、苦悩を（少年詩人の言葉を借りれば「胸の痛み」を）もたらすものとしてうたわれている点である。

15歳のシュトルムに、恋愛のつらく苦しい思い、つまり「愛の痛み」を味わわせた人物、現存するシュトルムの詩の中で最も古い作品にうたわれているエマなる女性は、いったいどういう人物だったのだろう。

このエマとは、おそらくエマ・キュールのこととされている。彼女のことについては、これまであまり深く研究されてこなかった。かつてのベルタの場合と同様に、作品の質が質だけに、いきおい彼女のことも等閑視されてきたのである。せいぜいシュトルムの初めての恋愛対象として紹介される程度であった。とはいえ、地方の郷土史家の地道な調査などもあり、彼女の人生の大まかなところまでは把握できるようになってきた³⁰⁾。また、関連の文書館に保管されていたシュトルムの書簡類が20世紀末から次々と公刊され、彼女とシュトルムとの関係のあらましもおおよそは跡づけられるようになった³¹⁾。

彼女は1819年8月18日³²⁾にフェール島のヴィークに生まれた（正式名ハインケ・ケルスティーナ・エマ・キュール）。税務官僚の父デトレフ・ニコラウス・フリードリヒ・キュールは、ひよっとするとヴォルトゼン家の遠縁、つまりシュトルムとも親戚関係にあったかもしれないと推測されているが、それはあくまで推測の域を出ないとのことである。この父の勤め先の斜め向かいにベッカーの薬局があったのだが、そこはフェール島で認可された唯一の薬局というだけではなく、他に先駆け、海水の成分を分析し、海水浴の効能

を広めるのに大きな役割を果たした薬局でもあった。その薬剤師ベッカーの妻がシュトルムの親戚で、彼女には子供がいなかったこともあり、税務官僚の次女エマをかわいがり、エマも「毎日」薬局に遊びに来たそうである。³³⁾

ふたりの出会いについては、シュトルム本人から語ってもらうことにしよう。後年、許嫁のコンスタンツェに彼が告白した手紙からの引用である。

僕がまだ12歳の少年だった頃かもしれない。フェール島に住むヴォルトゼン家のお姉さんち [=ベッカーの妻の家] で何日か過ごしたことがあった。そこに当時まだ小っちゃな女の子だったエマが毎日遊びに来ていたんだ。一緒に遊んだり、外へ出かけたりして、お互い本当に好きになった。今でもはっきり覚えているけど、台所のドアの向こうに隠れてふたりで何度もキスし合ったものだ。あの頃はふたりとも本当に子供だった。そんな仲がもとで、妹のヘレーネにも僕が紹介し、ふたりも仲良くなったわけだ。³⁴⁾

この引用には私たちが注目すべき点が幾つもある。

まず第1に、ふたりは子供時代に愛し合ったという点である。おそらく許嫁を意識したであろう表現「ふたりとも本当に子供」が、はたして適切かどうかは別にして、シュトルムが12歳であれば、2歳年下のエマは当時10歳。アルトナの聖夜に出会った、あのベルタと同じ年齢であったことにまず注目しなければならない。

第2に、地図を見れば一目瞭然であるが、フェール島はフーズムよりも北に位置する。もうデンマークとの国境に近い島である。してみれば、先の「愛の痛み」にうたわれていた「遙か遠い北の方」という表現もごく自然なものを受け取れるではないか。

そして3番目に注目したいのは「隠れてふたりで何度もキスし合った」という箇所である。なぜならば、幼い頃シュトルムは、愛情表現の乏しい両親と抱擁や口づけを交わした記憶がないと語っているからである。レープリングの指摘どおり、そういった両親、とくに母親との〈分離不安〉³⁵⁾が生み出した妹への〈固着〉、シスターコンプレックスがここに現われていると受け取れるだろう。12歳という年齢にしては、おませな行為の中には、彼の〈分離不安〉が潜んでいるのである。第1の点とともに、私たちは、ここにシュトルムの愛の原型を見ることができるかもしれない。幼くして死別した妹ルーツイエをうたった詩の中でも「あの子の小っちゃなベッドにお供して／頬と頬をそえ、ふたりは夜ごと眠ったもの」(30)とシュトルムは回想している。この幼年時代に味わった喜びを彼は「幼い安らぎ」(30)と表現しているが、それは〈分離不安〉をつかま忘れさせてくれるアンドロギュノスの合一の陶醉だったのかもしれない。6歳のルーツイエを病に奪われたのは1829年。奇しくもまた、シュトルム12歳の年のことであった。

いかがだろうか？

この少年の日の愛の体験が、19歳のクリスマス・イブによみがえってきたとしても何ら不思議ではない。そう思われまいだろうか？ 目の前に「自由奔放で明るい性格の化身」が現われたのを見て、かつて隠れて「何度もキスし合った」少女、「遙か遠い北の方」に住む当時10歳だったエマ——彼女の面影が彷彿としてくるのも当然ではなかったか。そして彼女との間に繰り広げられたであろう、幼いなりに、やはりつらい「愛の痛み」が言語化されたとしても（それが相変わらず凡庸であったにせよ）ごく自然な成り行きだったのではないだろうか。

第4章 「エマの記念帖に」その他

12歳の愛の体験、15歳の時の初めての詩「エマへ」、そして19歳の「愛の痛み」（ちなみにこれもやはり「僕の詩集」の中に大切に書き込まれている）、それらの間をつなぐ別の資料を私たちはまた参照することもできる。もちろんそれも「僕の詩集」に収められているひとつの作品である。

エマの記念帖に

僕の心の奥深く、たたずんでいる
陰鬱な面影が。僕の気持ちは震える
未来を見通そうとすると。
ひよっとすると、大地が^{みたび}三度
新たな命を芽吹かせる前に、凍える息吹が
この青春のみずみずしい^{はなわ}花冠を台無しにしてしまうのでは。
ひとときは流されよう
友を思う悲しみの涙が。
だが時は、癒す
傷口を、そして僕は、忘れ去られる。
そうして、軽やかな小舟が君を
黒い満ち潮にのせ
身近な男の岸辺にいざなえば、
そして僕の名前などとうにかき消えているのだから、
そしてトネリコの木陰が

そのとき僕という存在を覆い隠しているのだから、
 だから君の心よ、すぐ戻っておいで
 あの楽しかった時に
 そして、君の瞳よ、姿を現わしておくれ
 悲しみの涙をとおして。
 そうすれば、僕にのしかかる
 この岩塊いわおも、耐えやすくなるだろう。

(157)

1833年に手書き詩集帖を書き始めて以来、詩人の卵は記入ごとに通し番号を丁寧ていねいに付けている。「エマへ」の第1番から始まって、この「エマの記念帖に」は51番目にあたる。しかも幸いなことに、この詩にも成立の日が記されていて、「35年9月28日」となっている。つまりシュトルムが18歳になったばかりのころの作品であることがわかる。

この間に彼らの間にどういった交流があったのか、それはまったくわからない。ともかく、12歳で知り合い、幼い愛の喜びを味わって以来、15歳そして18歳とシュトルムは、エマと何らかの交際を続けてきたことだけは確かである。そして、この18歳の作品から受け取れるのもまた、15歳の作品と同様、「愛の痛み」ないしは愛の不安なのである。

フーズムのラテン語学校の最上級生は、翌10月からはカタリーネウム校で学ぶためリュベックにおもむかなくてはならない。ただでさえ遠く離れた島の娘とは、これからいっそう会えなくなってしまうだろう。それは愛の終わりにつながるのではないか、詩の前半でうたわれているのは、そういった若者の不安であろう。おそらくは、名残を惜しみにフェール島を訪れた若者は、エマの記念帖に切実な思いをしたためた（その写しを持ち帰り「僕の詩集」に書き込んだのも、それだけ実感がこもった作品だったからなのである

³⁶⁾う)。「この青春のみずみずしい^{はなわ}花冠」と語られているように今ふたりの間には相愛の関係が結ばれている。しかし〈分離不安〉の「陰鬱な面影」に襲われる若者には、未来は決して明るい希望につながらない。3年も経てばきれいさっぱりと忘れられてしまう、と（自分のことはさておき）悲観するのである。

ここにもまた私たちはシュトルムに典型的な愛の形を見て取ることができよう。愛の対象は消え失せるもの、愛する相手からは常に捨てられる——若者の心を苛むそんな強迫観念は、何もこの10代の頃に限ったことではなかった。たとえば、婚約者コンスタンツェに頻繁に書き送った手紙のことを、そして、そこでいかに執拗に愛の応答を要求していたかを思い出してみよう。その執拗さに見て取れるのは彼の心に巣くう強迫観念の大きさであるだろう。さらにそれは恋愛感情に留まらず、同性の友人たちにまで向けられていた。信頼する文学上の友人パウル・ハイゼから思わぬ贈り物をされたシュトルムは、素直に喜ぶのではなく、かえって不安になり、自分を見捨てようとしているに違いない、どうぞそんなことをしないでくれと懇願するのである（その際、かつて予想外の喜びを母から与えられて不安になり、自分は殺されるに違いないと考えた幼い日のエピソードを彼は包み隠さず披露し、ハイゼに理解と〈翻意〉を求めている³⁷⁾）。しかもそれは10代や20代のことではない。晩年の65歳になってのことであった。

こういったシュトルムの愛全般に潜む不安は、「軽やかな小舟」や「黒い満ち潮」といった想像の世界をふくらませ、ついにはエマが「身近な男の岸辺にいざな」われる光景まで思い描いてしまう（こういった形象は、フェール島を具体的に想起させるし、15歳の作品より遙かに個性的で実感を感じさせると思うのだが、それは^{ひいきめ}轟頁目に過ぎるだろうか?）。

だが、しかしそういった一連の悪い予感を振り払おうと、最後に至って彼

は、相手にしっかりと呼びかけるのである。

だから君の心よ、すぐ戻っておいで
あの楽しかった時に

この呼びかけこそ、シュトルムの愛の基本的方向性を表わすものかもしれない。愛は時の無常にさらされ必ず失われてゆく。しかし、失われるものであるとしても、かつてそれが現前した事実は記憶とともにいつまでも留めることができる。ちょうど、私たちがいくら年老いてしまおうと、心の中に幼年時代の記憶を美しいままに、いや、その時よりいっそう美しく留めることができるように。

18歳の若者が16歳の娘に戻ろうと呼びかける「あの楽しかった時」とは、もちろん「ふたりで何度もキスし合った」時間、あの無邪気な性を超えた合一の時のことだろう。思春期を迎えたふたりにとって、それはもはや帰還を許されない〈失樂園〉に他ならない。そのことを痛感すればするほど、よりいっそうその呼びかけは痛切なものになるだろう。

デテリングが指摘したように、シュトルムのベルタ崇拜とは、幼年時代＝黄金郷の再獲得の真剣で、かつ虚しい試みであった。7年近いやり取りの中から生まれた秀作には、幾度もベルタを出会いの子供時代に引き戻そうとする詩人の呼びかけが認められる。だがしかし、もうすでにこの最初の恋人エマとの関係においても、そのような呼びかけはなされていた。この点に私たちは注目しておきたいのである。

*

1836年のクリスマスに書かれた「愛の痛み」もまたこれまでどおり「僕の詩集」（＝MG）に書き加えられ、若き詩人から作品番号83番を与えられている。私たちはこれまでに、この83番の詩とエマ・キュールを結ぶものとして、1番の詩、51番の詩を取り扱ってきた。この2作ほど明確ではないが、私見によれば、おそらくエマ関連と考えられる作品が他にもこの手書き詩集帖の中に認められる。その中のいくつかを以下で簡単に見てみることにしよう。

たとえば、「僕の詩集」の10番目に記入されている作品である。

すげなくされた男の愛の嘆き

君の瞳は何の関心も示さず、じっと前を向いていられるのか
この胸の中を嵐が荒れ狂っているのに！
耐えねばならないのか僕は、待ち続けなくては
苦痛と歓喜のはざまで格闘しなければならないのか？！

ああ、たった一度だけ僕に姿を見せておくれ
一度だけやさしい瞳のその光から
安らぎと勇気を汲み取らせておくれ
この胸には慰めが奪われてしまったのだから！

ああ、そんなに冷たく僕を苦しめないでおくれ
やわらげておくれ、癒やしておくれ、この痛みを
鎮めておくれ、僕の焦がれる思いを、この渴望を
救っておくれ、この引き裂かれた心を

それとも君は僕を滅ぼそうとしているのか
それとも愛とはそもそも狂気なのか
よしんばそうであれ、僕は祈る、君には誰もあんなこと
つれない君が僕にしたあんな仕打ちなんか決してしないようにと！

いや、僕を厳しく非難しないでくれ
この苦しみを増さないでくれ
胸の炎は恐ろしく倍増し
僕の心を焼き尽くしてしまうから

ああ、苦悩するために僕は生まれてきた
この痛みが僕を滅ぼす！
君がたとえこの胸をえぐろうとも
息を引き取る時にも、僕は愛している、君を (135f)

この詩には残念ながら成立年月日が記されていない。ただ、「僕の詩集」収録作品の前後関係などから、1834年の早い時期に記入されたものと考えられる（もちろん作品成立は、その頃ないし、それ以前ということになる）。1番目の「エマへ」が1833年の7月17日成立であったから、この10番目の詩はそれからまだ半年ほどしか経たない頃の作品ということになる。詩人の卵の嘆きは、主観的には唯一無二のものなのであろう。しかし、見出された表現は残念ながら通り一遍の常套句や、お定まりの文言に終始していて、のちの体験詩人が何より重視した実感を感じさせる個性的な表現は皆無である。それゆえ、これがエマにあてられた作品であるという確証も詩の中に求めるこ

とは難しい。しかし、推定される成立時期からして、やはりエマ関連に相違ないだろう。

それに何より、この詩においても、主題となっているのが、「愛の痛み」である点に注目しなくてはならない。先に見た「エマへ」あるいは「エマの記念帖に」と同様、少年詩人は相手に愛を感じれば感じるほど「すげなくされ」ることに敏感に反応してしまう。エマはたしかに奔放で気ままな娘だったかもしれない（「移り気な美人草を／君みたいな人には捧げよう」）。しかしながら、その一方でシュトルムの心に巣くう強迫観念が過敏に反応し、そのような不安や「愛の痛み」を醸成しているのかもしれない。こういったいわばシュトルム的といってもよい愛のあり方を、しかし年若い詩人はまだ適切に表現する術を持ち合わせていない。それゆえに、この「すげなくされた男の愛の嘆き」（MG10）においては、ただただ悲痛な訴えに終始するしかないのである。

次に見ておきたいのが、「僕の詩集」（MG）の40番目の作品である。これも上の作品と同様、残念ながら成立年月日不詳であるが、おそらく1835年（45番が同年の秋に記入されたと考えられているので、それ以前）に記入されたものと推定されている。先に見た「エマの記念帖に」（MG51）はリユーバックにおもむく直前にできた思い出深い作品であった。それより以前に記入されたこの40番の作品は、フーズムで過ごす最後の春か夏に、恋する人を思って書かれたのであろう。

急ぐ風たちよ

どうか、やさしく揺れておくれ

僕の詩がうたかわいい人の耳元にささやこうとしているんだから

小鳥たちは歌う
小鳥たちは運ぶ
喜びの調べを、あの子の澄ます耳元に！

ひらけ、薔薇
ひろがれ、やさしい苔の諸君
手をつなげ、草花の諸君、香しい花束となれ

あの子の胸元を飾り
あの子のジョークに耳を澄まし
憂鬱な悲しみを追い払ってやってくれ

きらめく星々よ
遠くから照らせ
天上はるか高いところから、あの子の喜びと歓喜を

やさしい星々よ
君たちがそんなに遠くでないのなら
明るい光で慰めてやってくれるだろうに、恋するあの子の胸を（151f）

「エマの記念帖に」にこめられていた切実な思いは、この詩の中にはまだ感じられない。小鳥がさえずり、薔薇の咲く季節の到来を感じつつ、遠くの恋人に思いを馳せるという、お定まりの詩想に終始している。まだリューベック行きのこととも父親から聞かされていないのであろうか、のんびりと夜空の

星を眺めてはひとり切なくなり、さみしい思いをしている（であろう）彼女のことを思いやっては、自らを慰めている。先の「すげなくされた男の愛の嘆き」（MG10）と同様、これまた常套的で個性の少ない詩ゆえ、「かわいい人」がエマであるという確証を作品内に求めることは難しい。しかも、あえて上で示さなかったのだが、この作品のタイトルは「遠く離れた彼女 M... に（An die Entfernte M...）³⁹⁾」となっている。つまりイニシャルが E ではなく、M になっていて、いっそうエマ関連の詩とは言い難いように見える。しかし、この時期、エマ以外にいったいどのような「遠く離れた」恋人がいたのだろうか？（フーズム市内の娘とならならいざ知らず、そのような遠くの出会いがあるとは考えにくい）。M とは、もしかしてイニシャルではなく、発音をそのまま音写したものの、つまり「エム」は、やはり「エム・ア」を意味するシュトルムだけの記号だったのではなからうか（10代の若者あるいは12歳の少年ならいかにも思いつきそうな遊びではないか!?)。

ちなみにこの詩は1990年代前半に、書誌学的な注目を浴びることになった。それまでは詩人の最も早い活字発表は1839年のベルリン／キール大学時代のものと考えられていたのだが、「フーズム週刊新聞」に掲載された2作品が発見され、1834年と36年（つまりまだ高等学校時代）にもうシュトルムの詩が活字になっていたことが判明した⁴⁰⁾。上に私たちが見た詩は、その2番目に古い活字作品だったのである。その際、テキストに多少の変更（あるいは活字ミス）が加えられた他に、タイトルも「僕の詩集」とは異なり、「遠く離れた彼女に（Der Entfernten）」と変更されている。自身の名前も「St...」と匿名にしてあるのだから、もとのまま「遠く離れた彼女 M... に」にしても良さそうなものであるが、より穏便な題名が選ばれているのである。そうしたのも、先ほど私が想像したように自分だけの記号のせいで、またエマと悶着をおこしたくなかったから、というのは穿ちすぎた見方だろうか？

*

少し横道にそれすぎたようだ。話を戻そう。

シュトルムにとって詩人として歩むべき方向を決定づけたベルタ・フォン・ブーハンとの出会いに私たちは注目し、研究史や伝記資料などを概観した。以前と比べ、ベルタ体験は遙かに重要視されるようになってきた。そのことに異論はない。ただ、ベルタに脚光を当てるあまり、実はそのかたわらに佇んでいる別の人物の姿を取り逃がしているのではないか、それが私たちの着眼点であった。

シュトルムの初恋の人物、フェール島のエマ・キュールは、彼の手書き詩集帖の第1頁を飾るだけではなく、彼が初めてふるさと以外の土地で暮らすようになる際、思いをこめて記念帖に詩を書き込んだ人物でもあった。——テオドール少年が12歳の時（それは最愛の妹と永遠に別れなければならなかった年でもあった）、北海沿岸の島で出会った少女は、後のベルタと同じ10歳であった。彼女との幼い合一の喜びは、シュトルムの愛の原型であり、その瞬間に立ち返りたいという衝動が、彼を突き動かしてきた。ベルタ崇拜において認められるシュトルムの愛の特徴は、すでにエマとの交流の中にも認められるものであった。19歳のクリスマスの朝、彼が作った恋愛詩はベルタとの出会いをきっかけとしたものであったかもしれない。だがしかし、それはかつて10歳の少女、そして今17歳になったエマを思い描いた切ない作品だったのである。

第5章 「カモメと心」（ベルタそれともエマ？）

ここで今度は、最新のベルタ研究を行なったデテリングの作品解釈に目を向けてみたい。なぜなら、ここにもまた上でまとめたこととよく似た現象が見受けられるからであり、そこに注目することは、ベルタ理解に留まらず、シュトルムの初期抒情詩に隠されているエマのイメージをより明確なものにしてくれるだろうからである。

まずは、作品をLL版からではなく、彼の著書から引くことにしたい。というのも、彼はLL版が掲載している初出のテキスト（= E：「カモメと我が心」162）ではなく、その手稿、それも二つ折りの紙に手書きされたテキストを問題にしているからである。

カモメと心

西をめざしていくカモメ

北をめざしていく我が心

互いに急いで飛び立っていく

ふたつはふるさとへ飛んでいく

心よ落ち着け！ もうおまえは到着した

あんなに遠い道のりをひとつ飛びしてきたのだ

カモメのほうはまだ翼を動かし飛んでいるのに

遙かな大洋のうえを⁴¹⁾

私が下線を引いた箇所がEのテキストと違う点で、とくに1・2行目の方角に関しては色々問題を含んでいるのだが、そのことは後回しにして、とりあえずデテリングの解釈をきちんと見てみることにしよう。

まず彼は、上の詩を引用するにあたり、「すでに1836年の初頭、あるいはひょっとするともう少し早く、彼〔シュトルム〕は次のような二連の詩を書いた」と前置きをし、以下のように解釈を展開している。少し長い引用になるが、お付き合い願いたい。

[上の詩が書かれている] 用紙は何回か折られていて、別の面には他の詩も記入されている。そのひとつにはシュトルムのサインがある。そして下には住所として「リュエバック」となっている。だからこそ、北かつ西であるという方角に郷愁が向くのである。この詩が書かれたきっかけや具体的に何をめざして書かれたのかは、この方角を見ればおのずと了解できるものである——ただし、詩の作者がどんな人物でどんな境遇であったのかを承知していない読者には何のことかさっぱり理解できないに違いないが。それとは逆にこの詩を最初に贈られた人物には、その方角の意味するところは一目瞭然だった——リュエバックにいてフーズムを懐かしむ高校生がこの詩句を宛てた人物、つまりベルタ・フォン・ブーハンには。彼女はこの詩を遺品として後世にまで残してくれた。だが、しかし彼女はまた、自分の住んでいる場所がリュエバックから見た場合、北西とは違う方向に位置していることも承知していたはずである。それゆえ、この幼い恋人（あるいは恋人である子供）に宛てて書くという行為は、詩に恋愛要素を与えるためだけではなくたのである——暗黙のうちに了解されていることだが、まずは郷愁があり、その中に愛の憧れが潜められているのである。そして、その憧れは場所には

なく、ひとりの人物に向けられている。ふるさと・恋愛・幼さ、そういったものが一体となっている状態、それを愛し守り抜いてくれるよう、詩の語り手は受け手に強いているのである。⁴²⁾

ベルタの無垢に「黄金時代」を見出し、その再獲得を自らも願う若者にとって彼女は常に幼くあり続けなければならない。恋人として渴望しながら、一方でシュトルムは日々成長するベルタに子供時代に戻ろうとしきりに提案する。それはほとんど強要に近いものだった、とデテリングは捉えているわけである。しかも、恋愛と幼さという要素だけではなく、ふるさとという要素まで背負わされてしまっているという。なぜならば、幼年時代は必ずふるさとと結びつかねばならないからである。

このような解釈は魅力的であり、方角の不一致（ベルタのアルトナは北西ではなく南西に位置している）のことも一応は納得がいくように思える（「まずは郷愁があり、その中に愛の憧れが潜められている」からなのだ）。その他の問題（たとえば、そもそも心の「北」とカモメの「西」を「北かつ西」と捉え、ひとつの方角に解釈する点など）も含め、細部の検討はいったん後回しにして、このような魅力的な解釈をまずはそのまま正しいと受け取ってみよう。そうすると、むしろデテリングの見解には、もっとよりいっそう相応しい人物が思い浮かぶのではないだろうか？

リューバックから北西の方角に位置するふるさとフーズム、そのフーズムよりさらにまた北西に位置する「遙かな大洋のうえ」に浮かぶ島（だからこそカモメは海の上を飛んでいるのである！）。その島の住人、幼いころ幸福な合一体験を共有した相手、残念にも自分と同じように今はもう思春期に入ってしまったにせよ、18の別れに際して切ない思いを寄せた恋人、そう、エマのほうが、ずっと詩の受取人として相応しいのではないだろうか？

デテリングの解釈を尊重すれば、必然的にエマの姿に行き当たってしまうのだが、それだけではない。別の視点からしても、当該の詩はむしろエマ関連と見るほうが正しいようなのだ。

少し込み入った話で恐縮だが、先の引用には、デテリングの勘違いか思い込みとおぼしき事柄が含まれていた。

まずは、私が上点を付しておいた箇所、すなわち当該の詩が、二つ折りの用紙に書き込まれた時期について見ておこう。

デテリングは「1836年の初頭、あるいはひよっとするともう少し早く」と書いている。しかし、これは単純な思い違い、あるいは誤植のたぐいであろう。考えてみればすぐわかることだが、シュトルムがベルタと出会うのは1836年のクリスマス・イブである。LL版のコメンタールも、この二つ折りの手稿は、「[そこに付記されている] リューベックの住所からして1837年の最初の数ヶ月に書かれた」としている。

36年のクリスマス・イブに出会い、年末ないし翌37年の1月リューベックに戻ってすぐ、シュトルムはベルタに詩を贈った。デテリングの言いたかったことも結局そういうことであろうし、この誤植はそう理解すれば良いだけのことかもしれない。ただし困ったことに、そのような単純な〈誤植〉ではなく、本当に36年の初頭と思い込んでいるようにも見受けられる。というのも、36年4月に成立した別の詩を紹介するにあたり「同じ時期に書かれた、また別の詩 (Ein zweites, in derselben Zeit geschriebenes Gedicht)」とデテリングは書き、しかも註にそれが36年4月12日成立であることを明記しているからである。⁴³⁾

事柄は、どうやら単なる誤植ではなく、思い込みが生んだ時代錯誤^{アナクロニズム}のよう⁴³⁾に見受けられる。

しかし、問題はそれに留まらない。

むしろ今の場合、注意すべきは、ベルタに注目するあまり、文献学的な目配りを少々おろそかにしている点にあると言わねばならない。

つまり、デテリングが取り上げた二つ折り用紙の「カモメと心」には、もうひとつ別の草稿が存在し、しかもそちらの方が古いものだと現在考えられているのである。その点を考慮しないで（あるいは紹介しないで）自説を展開するのは少々あわてすぎ（あるいは飛躍しすぎ）ではないだろうか。

落ち着いてその点を見ていこう。

私たちが依拠する LL 版によれば、初出（E）の「カモメと我が心」（162）には、ふたつの手稿が存在する。デテリングの注目する「カモメと心」は、上述のとおり 2 番目のものと考えられ、H2と略号が付されている。これに対し、それより以前のもので全集編者ローマイアーが考えているもうひとつ別の手稿 H1がある。それは、これまで私たちが色々手がかりにしてきた MG、つまり「エマへ」が第 1 頁を飾る、あの「僕の詩集」である。

問題の詩は、この手書き詩集帖の60番目に書き込まれている。残念ながら、成立年月日の記載はないのだが、その代わり、有難いことに前後の詩、すなわち MG の59番目と61番目の詩は、それぞれ成立年月日が明記されている（「1836年 4 月」と「1836年 4 月16日」）。もちろん作品の「成立」と MG への「記入」は必ずしも直結するものではない。しかし、「僕の詩集」は基本的に成立年代順に記入されるのが原則となっている（15歳の少年が記入を始めるにあたり、通し番号を付けたのも、おそらくはその意味合いが強かっただろう）。例外がないわけではないが、大方のところでは MG 記入の順番と成立の順番はほぼ一致していると考えられる。前後を1836年 4 月成立の作品にはさまれている以上、私たちの注目する詩もまた同じく36年 4 月成立の可能性が極めて高いように思われる。

ちなみに、青少年期のシュトルム作品に注目し、それらを編纂したエーヴ

ァスベルクの著書においては慎重を期してか、「[MG に] 1836年の春に記入」とされている。⁴⁴⁾

以上のことを踏まえれば、そもそも問題の詩（H1 = MG60）はベルタと出会う以前（それもおそらくは半年以上も前）に書かれた作品、つまり彼女とは何の関係もなく成立した作品だったとすることができるのである。

ただし、デテリングが注目した二つ折り用紙の手稿（H2）のことがある。これはどう考えればよいのだろうか？

それについては、意外と簡単に説明がつかだろう。つまり、36年のクリスマス・イブに知り合ったあと、翌37年の初頭（あるいはそれより少し前に）シュトルムはベルタに詩を贈ることを思いついた。そのために（新作ではなく）自分のための手書き詩集帖 MG の中から、適当と思われる詩を選んだのである。選ばれたのは今私たちが注目している作品以外に3つ。2つが「1836年6月20日」成立の作品で、残りのひとつも「1836年春に記入」と推定される作品である。⁴⁵⁾ これらのことからわかるように、知り合ってもないベルタに送付された詩は、彼女との出会い以前にできたものばかりであった。青年詩人は、出会いによって生み出された作品よりも、まずは自信作を優先し、それらをプレゼントすることに⁴⁶⁾したわけである。

もう一度、先ほどのデテリングの解釈を思いだそう。

すでに見たように彼の解釈に従うと、私たちの詩は自然とエマ関連と受け取れた。そして今確認したように文献学的に見てもまたそう考えるのが妥当なのであった。たしかに、ベルタに贈られはしたが、本来はこれもまたエマへの思いがこめられた作品だった、そう考えることが最も自然で納得がいくだろう。「愛の痛み」同様「カモメと心」にもベルタに隠れてエマがいるの

である。

それでは次に、上で予告しておいた方角のことに移りたいのだが、その前にひとつ関連の詩をご覧くださいことにしたい。

ふるさとへ

西に向かって急ぐのか、白いカモメよ
僕のふるさとの地に向かって？
ああ、それなら僕からの挨拶を、遙か遠くの
あの涼しげな僕の岸辺に届けておくれ

翼をはためかせよ、白いカモメ
もうすぐ、僕のいとしい人の姿が見える
そうしたら、告げておくれ、ここの太陽は暖かだ
でも、人の心は冷たいって

(164)

この詩も問題の詩とほぼ同じ頃の作品で、成立は「1836年4月12日」。これもまた、リュウベックに来てから約半年後の作品ということになる。18歳の高校生には、その頃が一番ふるさとの恋しくなる時期かもしれない。季節もちょうど早春であり、気持ちが外に向かい始める時だけに、いっそう郷愁は強まったのだろう。それゆえ、幾つも同じような詩が試みられたのである。その際もちろん、郷愁は郷愁に留まらない。「カモメと心」同様に、また「いとしい人」への思いも掻き立てられずにはいられない。デテリングが指摘していたように、ふるさととは恋愛と一体だった。ふるさとフーズムより南

のリュウベックにいて、彼は自分の孤独を訴える（「この太陽は暖かだ／でも、人の心は冷たいって」⁴⁷⁾）。恋人に向けられた、その訴えを伝える役目は、この詩でも「白いカモメ」が仰せつかっている。

しかし、このカモメが向かう方向は、「北西」ではなく「西」とされている。——実はデテリングが引いた「カモメと心」(H2) のテキストも、ローマイアーやエーヴァスベルクによると、1行目も2行目も「西を」「西を」であって、デテリングの言うような「西を」「北を」ではないとされているのである。⁴⁸⁾ はたしてどちらの読みが正しいのだろうか？ 3人は3人ともH2つまり二つ折り用紙の現物に当たっている。今そうすることのできない私たちに判断することは難しいが、カモメと心は同じところ（ここでいう「僕のふるさと」）へ向かって飛んでいるはずで、やはりローマイアーやエーヴァスベルクの読みの方が、デテリングの「北かつ西」つまり「北西」という読みよりも、ずっと自然でわかりやすい表現のように思われる。

たとえば、もうひとつ別の詩を見てみよう。

ふるさとへ、ふるさとへ
 僕の^{リラ}豎琴の^{ねいろ}音色は飛んで行く
 西海の広大な浜辺には
 僕の^{カメナイ}聖泉の妖精が住んでいる！

(178)

これはタイトルなしで、「僕の詩集」(MG) の表紙の見返しに記入されているそうである。つまり第1番目の「エマへ」と見開きの位置に収められているわけである（記入は、おそらく1836年）。

この四行詩においても、ふるさとは「西海」の「広大な浜辺」の近くに位置しているとうたわれている。そこに向けて、今度はカモメではなく「僕の

「^リラ^{ねいろ}の音色」が飛んでいく。そして、そこには「僕の^カメ^ナイ^イの妖精が住んでいる！」という。この妖精とは誰のことだろうか。誰がイメージされているのだろう。おそらく第1頁にある詩「エマへ」にうたわれているのと同じ人物と考えられるのではないだろうか。

それはともかくとして、シュトルムたち北フリースラントの人間にとって、海は元来、西にあるものであった。この点を私たちは、今確認しておかねばならない。彼らにとって、北に向かおうが南に向かおうが、海は常に西にあり続ける。そのため、標準語の「北海」ではなく、「西海」という方言のほうがずっとリアリティを持っており、彼らの好んで口にする言葉だったのである。

そういったことを勘案すれば、この四行詩同様、郷愁をうたう「カモメと心」(H2)においても「西を」「西を」と繰り返す方が、いっそう恋しさが増すように思われるが、いかがだろうか？

以上、私たちはデテリングのテキスト読解に関連して、他の詩も参照しつつ方角の意味を概観してみた。

本文校訂の問題は最終的には現物を確かめるしかないにしても、ふるさと（そしてその向こうに住む恋人）に向かって飛んでいく心もカモメも初めから同じ方向を向いているほうが、ずっと素直でわかりやすい表現ではあるだろう。

ともかく、「カモメと心」(H2)のテキストが「西を」「西を」であれ「西を」「北を」であれ、私たちが忘れてならないのは、むしろそれより古い草稿(H1)が存在していることである（ちなみに、こちらは「西を」「西を」となっている⁵⁰⁾）。そして、何より今大切なことは、その最初の草稿(H1)つまり「僕の詩集」(MG)の60番目の作品が、ベルタと出会う以前それも半

年以上も前に成立しているという点である。すでに見たようにこの作品は、フーズムを離れて初めての春、カタリーネウム校の高校生が、ふるさとを、そしてその向こうにいる「いとしい人」を思って作った詩だった。もう一度確認しておこう。ここにもまたベルタではなく、エマがいるのである。⁵¹⁾

第6章 エマ、その面影

遠く離れた「いとしい人」エマとの〈心の交流〉は、ベルタとの出会いによって立ち消えになったわけではなかった。10歳の少女の無垢に強く惹かれながらも、シュトルムの胸の中にエマの姿は留まり続けていた。クリスマスの朝、「愛の痛み」の強いイメージとしてよみがえっただけではない。やがては、ベルタの陰に隠れてしまうにせよ、しばらくはなお「いとしい人」のイメージとしてエマは彼の心の片隅に佇んでいた。

そして、その形姿はそのままフェードアウトするのではなく、最後に一瞬のきらめきを放つことになる。

1837年9月の休暇のことである。キール大学の学生は、もう一度エマと再会する。

その時の模様については、やはり本人の言葉に耳を傾けよう。

すでに幼い頃の思い出を婚約者コンスタンツェに報告していた、あの手紙からの引用である。

僕が若々しい学生として——ちょうど20歳になったばかりの頃——聖ミカエルの祝日を過ごすため、このふるさとに戻ってきたとき、妹のヘレーネにもちょうど訪ねて来た客があった。当時17歳のとても愛すべき興味ある女の子、フェール島出身のエマ・キュールだった。この子と妹

が知り合うようになったのは僕の働きかけによるもので、実は僕の方が先に彼女と知り合いになっていたのだ⁵²⁾。

こう前置きしたあと、26歳の弁護士は、子供の頃の思い出を披露する。それについてはすでに見たとおりである。そしてそのあと、次のように告白を始める。

—— [再会したとき] この女の子はしっかり勉強してもいたし、機知に富み、自然で抗いがたい愛くるしさがあったが、そのうえに尋常じゃないほどおませで色っぽいところがあった。そしてきれいで気立ても良かった。僕らは互いに親しい人称の du を使って話しかけた。それでもやはりこちらからも向こうからも懇懇な応対をすることもあった。同じように嫉妬心も感じたし、不機嫌な気持ちにもなった。彼女の性格からすればふたりの間には当然のことながら涙が流されないわけはなかった。少年の日に彼女を好きになっていたのだから、この時の毎日は、かつてのとき以上に狂おしいものだった。

繰り返すが、これは1837年の秋、つまりベルタと出会ってから半年以上経った時点のことである。再燃した情熱の炎は、思いのほかまばゆい光を放ったのであろう。まばゆさに目もくらみ、ついには一気に婚約にまで至ってしまうのである。しかし、それほど燃え立ちやすい情熱の炎は、また消えしほむのも素早かった。その時の事情も、やはり御本人の言葉に耳を傾けることにしよう。

——当時つけていた僕の日記がいま手元⁵³⁾にある。10月3日の朝、僕は正

式に彼女と結婚の約束をした。——その日の午後にはしかしもうそんな振る舞いをしてしまったことに激しい後悔を感じ、全てを取りやめにしておしまおうと決めた。その理由、今はっきりとわかるのだけど、それはただひとつ、僕がまだ若すぎたということ。しっかりと人生を生きていくためには、そもそもそんな早くに人を愛してはいけないのだ。愛という感情自体は正しくて健康なものではある。でも、あの子に僕が惹きつけられたものの中には、誤ったものが入り込んでいた。⁵⁴⁾とはいえ僕はふたりの関係をあっさりのご破算にしてしまう勇気がなかった。というのもスキャンダルになるのを恐れたから。そこで、事柄を秘密のままにしておいた。⁵⁵⁾

そしてシュトルムの取った行動は、ちょうど『みずうみ』のラインハルトと同じものであった。

僕がキールに戻ったとき、彼女もフェール島に旅立った。そして彼女には手紙を出さなかった。彼女の方からも出発する前に手紙を出してほしいとは言われなかった。たぶんそれとなく、どういう状態なのか気づいていたのだろう。彼女はとてもひどい病気になった。そのあと2月28日付でキールに初めての、そして唯一の手紙が彼女から届いた。彼女が言うには（そしてまたそれは正しいことでもあるが）、真心を許し難く弄ばれた者の当然の権利として、約束を撤回するとのことだった。

こうして、最後の炎は消えた。そして、無垢なベルタへの崇拜がいっそう強まり、大学生の感情生活の大方を占めることになる。しかしながら、この間の出来事は、あっさり忘れ去られたわけではなかった。手紙の書き手は、

自分の行ないを振り返り、大いに嫌悪し悔いている。そして、どうしてあんなことを自分ができたのかと自問する。「いま唯一説明がつくとしたら、僕は当時、受け容れられなかった愛の痛みがどれほどのものか、まったく知らなかったからなのだ」と彼は書いて⁵⁶⁾いる。続けて彼は「あれ以来、僕は何とあらゆることを経験したことだろうか！ どんなに僕は違った人間になったことか！」と振り返っている。もちろんその感慨の意味するところはベルタとの7年近いやり取りのことであろう。「愛についてまだまったく何もわかっていなかった」若者は、熱烈なベルタ崇拜の末に、結局は結婚の申し込みを拒絶された。「受け容れられなかった愛の痛みがどれほどのものか」彼は身をもって味わったのである。ベルタから受けた心の傷は、かつて自分がエマに与えた痛みの大きさもまたシュトルムに理解させたのである。

エマの物語には、実は続編がある。

1844年6月、フーズムの北の町プレートシュテットにおいて「北フリースラント祭」という音楽祭兼政治集会が催された。それに参加したシュトルムは、友人の差し金でエマと同じ宿舎をあてがわれていた。そのことを弟から知らされて、彼は急きょ別の宿を探し、対面を回避した。しかし自分が犯した「人生最大の罪」の記憶が生々しくよみがえり、ついには婚約者コンスタンツェに一部始終を告白せずにはおられなくなったのである（ちなみに言うところ、同じくこの祭りに参加した彼の妹とエマは会場で何度も打ち解けて話をしてきたそうである。シュトルムは遠くからそれを目撃している⁵⁷⁾）。

コンスタンツェとの文通においては、これ以降もふたりがエマについて言及する箇所がある（彼女の不幸な結婚や夫の暴力、そして離婚訴訟のこと⁵⁸⁾）。だが、そういった点に注目することはもう本稿の枠を超えているだろう。

まとめ、そしてしめくくり

詩人シュトルムにとって大きな契機をもたらした1836年の聖夜の出会いに注目し、第1章でベルタに関する研究史を概観した。妹や少女の存在あるいは幼年時代に対して研究者の関心が高まるにしたがい、ベルタ体験も脚光を浴び、今や研究の中心に据えられるようになってきた。そういったことを踏まえた上で、私たちはあえて、ベルタにではなく、もうひとり別の少女（そして娘）に目を向けてきた。最後に、ここまで見てきたエマ関連の事柄について簡単にまとめておこう。

シュトルムが12歳の時に知り合い、幼い恋の相手となったエマは、それ以降も彼の「いとしい人」であり続けた。だが、日本風に言えば中高生の、しかも遠距離恋愛である。小さな町の名士の息子テーオドルとフェール島の官吏の娘エマの間に結ばれた交際はごくあわいものに留まっただろう。大学生のときのベルタ崇拝以上に内実のともなわない恋愛、場合によってはシュトルムの詩心が、その時ときに生み出した想像の産物と呼ぶほうが良いものだったかもしれない。しかし、実体のない虚像であれ、若書きの詩の中に彼女のイメージは生き続けた。本稿で触れた詩以外でも、注意してみれば「僕の詩集」（MG）収録作品の中にはエマの姿を認められるものがあるだろう。「愛の痛み」や「カモメと我が心」の場合のようにベルタの陰に隠れて見落とされがちではあるのだが⁵⁹⁾…。

しめくくりとして、ひとつだけ、今度は短編小説の中に投影されているエマの姿を紹介して本稿を閉じたいと思う。

先にも少し触れたように『みずうみ』その他の短篇にも探せばエマ関連の

事柄は見つけられそうであるが、やはりベルタやドロテーアの陰に隠れていて、簡単に指摘することは難しい。そんななかで『遅咲きの薔薇』（1860年）に私たちは注目してみたい。仕事に追われ妻を顧みなかった夫が再び妻を新たな気持ちで愛するという話の発端、主人公の妻を紹介するくだりである。

当時僕は手紙で君に知らせたよね。ほぼ15年ほど前のことだけど、妻とは僕の両親の家で知り合ったって。彼女は僕の妹を訪ねて来ていたんだ。この地方の西海諸島に妹が海水浴に行ったとき、ふたりは出会ったんだ。（LL1, 430）

ここでもまた方言で呼ばれている「西海諸島」とは、もちろんフェール島やジュルト島を指す。海水浴の普及にはフェール島のベック薬局が尽力していたことも私たちはすでに知っている。そこの親戚の少年のことも、また毎日遊びに来る少女のことも、そして彼女が妹と友達になったことも。

この小説『遅咲きの薔薇』が発表されたのは1860年。奇しくもちょうどシュトルムがベルタと再会したのと同じ年である。かつてあれほど渴望した彼女の中に宗教臭さを感じ取り、「天よ、あんな人が僕の妻だったらどうなっていたらろう！」とシュトルムが慨嘆したことも私たちは知っている。

一方、つれなく捨てられたフェール島の娘のほうは、同じ年に発表されたこの短編小説において、主人公の妻のモデルに選ばれ（今度はコンスタンツェの陰に隠れて、やはりそれとは気づかれないままに）その姿を今に留めているのである。

【使用テキスト】

Theodor Storm: Sämtliche Werke in vier Bänden. Hrsg. von Karl Ernst Laage

und Dieter Lohmeier. Frankfurt am Main 1987f.

本文中の詩の引用は上記の第1巻より行ない、直後のカッコに頁数のみを記す。詩以外の作品の引用は、LL と略記し、巻数と頁数を示す。

註

- 1) ちなみに前年の1835年のクリスマスもシュトルムはふるさとは戻っていない。Vgl. Brief an Therese Rowohl, [Anfang 1838]. In: Gerd Eversberg (Hrsg.): Storms erste große Liebe. Theodor Storm und Bertha von Buchan in Gedichten und Dokumenten. Heide 1995, S.101.
- 2) ウォリーの推測によると、シュトルムは1835年にもシェルフ家を訪れていたらしい (Elmer Otto Wooley: Storm und Bertha von Buchan. In: Schriften der Theodor-Storm-Gesellschaft (=STSG) Bd.2 (1953), S.19-51 (hier S.49: Anm.3))。その根拠となるのは、晩年のシュトルムが娘に宛てた手紙 (An Elsabe, 23. Dez. 1882) で、その中の回想では、18歳の誕生日以来この親戚から温かいもてなしを受けてきたものだと言われているからである。18歳の誕生日つまり1835年9月14日にはシュトルムはハンブルクのシェルフ家を訪ねていた、と確かにその文面からは受け取れる。しかし、はたしてそのとおりであろうか？ シュトルムがフーズムを離れ、リュウベックに旅立つのは35年10月のことであり、また9月30日には、フーズムのラテン語学校校長から卒業証明を授与されている (Volker Griese: Theodor Storm. Chronik seines Lebens. Husum 2002, S.19)。ハンブルクとの距離や当時の交通事情、あるいは引越し前の事情などを考えれば、18歳の誕生日はフーズムにいた可能性が高い。どうやら、65歳の父が娘宛の私信に書いた18という年齢にそれほどの信憑性はないと考えたほうが良さそうだ。
- 3) 上記の註2で見たように、35年訪問説を取るウォリーであるが、ことベルタとの出会いに関しては36年クリスマス・イブであったことを様々な点から確認している。
- 4) Thomas Mann: Theodor Storm. In: Thomas Mann. Gesammelte Werke in dreizehn Bänden. Frankfurt am Main 1990, Bd.IX, S.256.
- 5) Jochen Missfeldt: Du graue Stadt am Meer. Der Dichter Theodor Storm in seinem Jahrhundert. München 2013, S.62.

- 6) Theodor Storm: Sämtliche Werke. Mit einer Einleitung von Thomas Mann. Hrsg. von Friedrich Düsel. Berlin (1930), S.7-26 (hier S.16).
- 7) Vgl. Franz Stuckert: Theodor Storm. Seine Welt und sein Werk. Bremen 1955, S.40.
- 8) Gertrud Storm: Theodor Storm. Ein Bild seines Lebens. 1912 / 13 Berlin (Nachdruck: Hildesheim / Zürich / New York 1991), Bd.1, S.148-157.
- 9) R. Johannes Meyer (Hrsg.): Bertha von Buchan und Theodor Storm. Privatdruck. Hamburg 1930.
- 10) シュトルムの娘であり研究者でもあったゲルトルトの所有していた多くの資料類は、アメリカの研究者ウォリーに受け継がれることとなった。そのためベルタ関連の書簡類もまずは第2次大戦中のアメリカで公刊された (Elmer Otto Wooley: Storm and Bertha von Buchan. In: ders.: Studies in Theodor Storm. Bloomington (Indiana) 1943)。そののち、同じウォリーによってドイツ本国でも公表がなされたのは戦後も10年近く経とうかという1953年のことである (Wooley: a. a. O. (=Anm.2))。
- 11) Eversberg: a. a. O. (=Anm.1).
- 12) Meyer: a. a. O., S.3.
- 13) Gertrud Storm: a. a. O., Bd.1, S.148.
- 14) Meyer: a. a. O., S.11; vgl. auch Stuckert: a. a. O., S.41.
- 15) An Constanze Storm, 26. 8. 1860. In: Regina Fasold (Hrsg.): Theodor Storm – Constanze Storm Briefwechsel. Berlin 2009, S.158.
- 16) こうした恋愛至上主義は、たとえば「心乱すひと」(191f.)といったベルタ宛の詩にもはっきりと見て取れる。主眼はもちろんベルタをいかに愛しているか、それを伝えようとしているだけなのだが、信仰の側からすると不謹慎なレトリックを使用していることに本人は気づいていない、あるいはそんなことなど気にもかけていないのである。

もちろん、ベルタとの付き合いの中でシュトルムは反キリスト教の姿勢を積極的に示そうとしていたわけではない。そういった考えが彼自身の揺るがぬ確信となるのはハイリゲンシュタット時代のことであるし、またそうなってから後にでも、幼い子供の中にある宗教心までを彼は決して否定しようとはしていない。これについては拙著の第7章を参照のこと (加藤丈雄『シュトルム・回

- 想と空間の詩学』、鳥影社、2006年）。
- 17) Stuckert: a. a. O., S.40f.
 - 18) Irmgard Roebing: Liebe und Variationen. Zu einer biographischen Konstante in Storms Prosawerk. In: Literaturpsychologische Studien und Analysen. Amsterdamer Beiträge zur neuen Germanistik. Bd. 17 (1983). Hrsg. von Walter Schönau. S.99-130.
 - 19) Regina Fasold: Geschwisterliebe und Heimatsehnsucht in Texten Theodor Storms. In: Storm-Blätter aus Heiligenstadt 2000, S.12-30.
 - 20) このあたりの事情については、拙論「熱情と倫理の相克——シュトルムの物語詩「兄いもうとの血」について——」（大谷大学西洋文学研究会「西洋文学研究」第34号、2014年、37～104頁）でも多少紹介をしている（とくに49～54頁参照）。
 - 21) Heinrich Detering: Kindheitsspuren. Theodor Storm und das Ende der Romantik. (Heide) 2011, S.34.
 - 22) 蛇足めいて恐縮だが、ベルタ体験を一大契機と位置づけているデテリングもベルタ個人にそのような働きを見出しているわけではない。彼もまたベルタにシュトルムの思想的幻想の投映（84頁）、つまりマンの指摘した「偶像崇拜」を見ている。そのことは、前掲の引用からも窺えるだろう。
 - 23) An Friederike Scherff, [März 1841 Kiel]. In: Eversberg: a. a. O., S.124.
 - 24) Stuckert: a. a. O., S.41.
 - 25) ibid., S.176.
 - 26) Eversberg: a. a. O., S.30f.
 - 27) 実はLL版全集の『詩集』翻訳を担当するにあたり、私自身もそう思い、その方向で訳を行なったのだが…（日本シュトルム協会編・訳『シュトルム名作品集・第Ⅵ巻』、三元社、2013年、235頁以下参照）。
 - 28) An Therese Rowohl, [Anfang 1838]. In: Eversberg: a. a. O., S.102.
 - 29) 生涯、多くの相手と書簡のやり取りを続けたシュトルムの手元には1000通を越える手紙が残されている。Vgl. Gerd Eversberg: Theodor Storm als Schüler. Mit Prosatexten und Gedichten aus der Schulzeit. Heide 2006, S.22.
 - 30) Antje Erdmann-Degenhardt: „Es war alles damals heiße Glut...“ Theodor Storm und seine Verlobte Emma Kühl auf Föhr. In: Schleswig-Holstein 2001

H.9, S.1-5.

- 31) 残念ながら彼女とシュトルムが交わした書簡自体は残されていない。
- 32) 上記エルトマン=デーゲンハルトによる。ただし、ファーズルト編『シュトルム - コンスタンツェ・エスマルヒ書簡集』によれば、18日ではなく「8月8日」となっている (Theodor Storm - Constanze Esmarch Briefwechsel, Berlin 2002, Bd.1, S.441, Anm.16; auch Bd.2, S.571)
- 33) Erdmann-Degenhardt: a. a. O.
- 34) An Constanze Esmarch, 11. 6. 1844. In: Theodor Storm - Constanze Esmarch Briefwechsel, Bd.1, S.106.
- 35) Vgl. Briefwechsel Theodor Storm - Emil Kuh. In: Westermanns illustrierte deutsche Monatshefte 67 (1889 / 90), 270f.; auch Roebling: a. a. O., S.107.
- 36) あるいは、訪問以前にすでに作っておいて、彼女の記念帖に記入したのが9月28日だったのかもしれない (それともエマの方が記念帖をもって訪ねて来たのだろうか)。
- 37) An Paul Heyse, 27. 3. 1883. In: Clifford Albrecht Bernd (Hrsg.): Theodor Storm - Paul Heyse Briefwechsel. Berlin 1974, Bd. 3, S.45f.
- 38) たとえば「クリスマスに」(209) や「歌を添えて」(224)。また、デテリングの前掲書46頁以下も参照のこと。
- 39) Vgl. LL1, 907; auch Eversberg: Theodor Storm als Schüler, S.242.
- 40) Vgl. Gerd Eversberg: Storms erste Gedichtveröffentlichungen. In: STSG Bd. 41 / 1992, S.45-49.
- 41) Detering: a. a. O., S.127.
- 42) *ibid.*, S.127ff.
- 43) *ibid.*, S.129.
- 44) Gerd Eversberg: Theodor Storm als Schüler, S.252. Vgl. ders.: Storms erste große Liebe, 159f.
- 45) 「1836年6月20日」成立の2作品が「盗賊の大將」(158) と「病める男」(158)、「1836年春に記入」と推定されるのが「暗い葉陰にきらめいて」(163f.)。
- 46) のちの39年にシュトルムはそれまでの作品を自分なりに評価・選別しているが、4作品とも自信作に選ばれ、*vidi* 39と書き込まれている。
- 47) ちなみに言うと、第1連の「ああ、それなら僕からの挨拶を、遙か遠くの／

あの涼しげな僕の岸辺に届けておくれ」という箇所原文は O, so grüß mir meinen fernen / Kühlen Meeresstrand.である。「涼しげな」という形容詞 kühl が最終行冒頭に位置することで大文字に表記され、エマの名字キュール Kühl が何かきわだってくるように見えはしないだろうか?!

- 48) LL1, 912; Eversberg: Storms erste große Liebe, S.36; S.159f.
- 49) したがって、これには MG 番号も付いていない。エーヴァスベルクによれば、これは独立してはいるが、ひょっとするとひとつの詩の一部分と考えられるかもしれないとのこと。Eversberg: Theodor Storm als Schüler, S.267.
- 50) LL1, 912; Eversberg: Theodor Storm als Schüler, S.253.
- 51) なお、確認のため、問題の詩を保管しているフーズムのシュトルム・アルヒーフに問い合わせを行なった。二つ折り用紙の手稿 H2は、やはり「西を」「西を」と書かれているとの回答であった。
- 52) An Constanze Esmarch, 11. 6. 1844, a. a. O. なお引用では、エマは「当時17歳」とされているが、すでに見たように彼女は8月生まれであるから、正確には18歳になっている。
- 53) 現在その所在は不明。Vgl. LL4, 978.
- 54) 同じ手紙の中で、エマとの婚約は「熱い血のさわぎに過ぎなかった」とシュトルムは表現している (An Constanze Esmarch, 11. 6. 1844, a. a. O., S.107.)。そのため、研究者のほとんどは、精神的なベルタ崇拜に対して、エマは肉体的欲望の対象だったと単純に二分して捉えてしまう傾向がある。しかし、すでに見たように、元来エマとの〈恋愛〉もまた性を超えた幼い合一の喜びからスタートしたものだった。つたないながらも青少年期の詩には、その原点に戻りたいという願いが表現されてもいた。ベルタ体験に認められるシュトルムの愛のかたちは、エマ体験においても、その原型を認められる。劇的な幕切れのエピソードに気を取られて、それまでの前史に注目することを怠ってはならないだろう。
- 55) An Constanze Esmarch, 11. 6. 1844, a. a. O., S.106.
- 56) *ibid.*, S.106f.
- 57) *ibid.*, S.107.
- 58) An Constanze Esmarch, 20. 8. 1845, a. a. O., S.214f; Constanze Esmarch an Theodor Storm, 24. 8. 1845, a. a. O., S.230 usw.

- 59) シュトゥカートも、MG 第1作から、「それに続く、まだごちなくしなやかさのない詩句のほとんどは、この娘 [=エマ] に関連したものである」としている (Stuckert: a. a. O., S.39)。自分自身でそう指摘しておきながら、こと「愛の痛み」に関しては、ベルタ関連として論じていたのは、すでに見たとおりである。